

## 根を張る日々

手塚夏子  
Natsuko Tezuka

されていた文言。

「This is illegally occupied land. State of Palestine 194」

次にテルアビブへ向かう。テルアビブはきれいだったが、アメリカの一部であるかの如き状態をしばしば見せつけられ、居心地は悪く、ここも気分が晴れない。イスラエルでは人であることの意味をずっとぼくに問い続けたのだった。

それからパリ経由で一旦2月14日に東京に寄り、公演を行って再びサバティカルの続きで2月25日にタイのチェンマイに行き、東京に戻った。それが3月8日のことである。

### 旅の記憶

さて、この旅がどういう結果をぼくにもたらしたか、そんなことは簡単にとは言えない。旅は将来に渡って不断に自身に問い掛けてくるものだからだ。それは記憶となって染み付き、私のからだに澱のように残る。見た物、聴いた音、空気の感触、時間の流れ方、匂い、温度……これらが一体となって今後のぼくを形作っていくだろう。それが旅であり、旅の意味だ。

サバティカルでは素晴らしい時間を頂いた。今後、どう生きてくるかはぼく自身の楽しみでもある。感謝。



Photo: Minsa You

### 小池博史 (こいけひろし)

演出家・作家・振付家・舞台美術家、'舞台芸術の学校' 校長、「小池博史ブリッジプロジェクト」代表。茨城県日立市生まれ。1982年「パパ・タラフマラ」設立。以降、全55作品の作・演出・振付を手掛け、35カ国で上演、国際的評価を確立。その他の作品も各国で多数制作。つくば舞台芸術監督、アジア舞台芸術家フォーラム委員長、国際交流基金特定寄附金審議委員等を歴任。2012年5月、パパ・タラフマラ解散。翌月、「小池博史ブリッジプロジェクト」発足。「ブリッジプロジェクト」では教育、創造、発信を三本の柱とする。創作では、現在、宮澤賢治シリーズと「マハーバーラタ」シリーズをアジアの古典アーティストと共に展開中。

<http://kikh.com/>

### それまでの人生

ずっと閉塞感を感じていた。いつの頃からなのだろうか？ ありのままに生きられない。お互いどうし監視しあっているような窮屈さ。表面的に見えている物事と、実際その下で起きていることの乖離、そういったことを薄々感じていたのは子供の頃からだったと思う。けれども、それを具体的に観察することに快感を覚えるようになったのは、痛みの味を知った大人になってからだ。そして、演劇やダンスや文学や映像作品を作っている人たちに会った。けれど、何がよくて何が悪いか？ たくさんの価値観の海の中で、情報を処理しきれないと思ったとき、自分が本当にどう感じているか？ から出発して物事を試行錯誤していいんだ、と思うことができた。いろいろ実験していてもいいのかもしれない、と思えた。今ある何かの価値を選択して自分の足場を決めるのではなく、足場だと思っていたところを疑って行きながら、価値観の可能性を問い続けるという方法があると思えた。だから閉塞感にも向き合って生きて行ける、そういう前向きさが私の根底にはあったように思う。けれども震災が起きた。

### 震災が起きた

2011年3月11日以降、震災によって起きた原発事故、放射能漏洩、情報操作、利権を追求する企業の態度、そちらに追従するのが常識の企業世界と、起きていることに向き合いきれずに分裂していく人々の価値観、そういった一連の動きの中で、私も前向きに観察することが難しい精神状態に追い込まれていった。一番大きかったのは、とにかく「不安」というものだったと思う。具体的には自分の子供の安全に対してである。こういった不安は理屈ではなく、自分の体の深いところに作用してくる。実際のデータであるとか、証拠であるとか、情報の正確さであるとか、そういったこととは関係なく、不安は体を蝕む。もう一つは、自分が世界を認識していたその様が、実際の世界とは違った、という感覚である。価値観を固定しないでいたいという思いで試行錯誤して来たつもりだった。けれども、それはほんの一部にすぎなかったのだ。与えられた情報の中からある程度都合よく自分を安心させるように世界を認識しようとしていたのだ。だから、現実に向き合ってはいなかったと言っても過言ではない。結局は様々な依存の中に自分を置いていたのだ。その意味で、むき出しの現実がグロテスクな姿をさらし始めていると感じたときの恐怖といったらなかったのだ。自分がこれからどのように生きて行くか？ 今まで生きて来た物事の延長線上で生きることはできない、と感じると同時に、その足場のなさ、規範のなさは本当に不安をもたらす要因になっていった。

## 震災直前の日々 暴力の連鎖について考えていた

セゾン文化財団の助成を受けることができたのは震災が起きたちょうど一年前の2010年度だ\*。その頃、アジアインタラクティブリサーチという新しい取り組みを始めたばかりだった。日本という国の領域を疑って古い芸能を観察する試みであり、また同じような取り組みをいろいろなアーティストと共有するという内容だった。2010年に助成が始まる少し前の時期から、私自身がしてきたこと、感じていたことをいま一度たどりながら、3年間の助成期間が私にとってどのようなものであったのかを見て行きたいと思う。

そのころ、あるカウンセリングの方との出会いがあって、ドメスティックバイオレンスの加害者のためのワークショップというものを見学する機会を得た。加害者といっても、普通の男性である。その特徴といって、普通の男性であるというのが一番強い印象だった。その彼らがなんらかの理由で女性に暴力を振るってしまう、そのことに自分で向き合うためにワークショップを受けていた。その経験は私にとってはそうとうショックだった。そして暴力の連鎖について改めて考えさせられた。そこには誇りを失い続けている人々(それは結局私たちなのだが)の姿が浮かび上がって見えた。そして、それらの間が『私的解剖実験-5〜関わりの捏造〜』に結実して行った。

## 「渴き」について観察していた

また作品作りの中で自分が関わる若い人たちの中にある自己否定感とそれともなう憎しみにも似た感情があるのを感じて、それはいったい何なのか? について考えていた。自己否定的になるところから発する、「評価を欲する」感覚というものがある、それは渴きと呼ぶのにふさわしいと感じた。どこかからの評価で満たされたいと願っていてもかなわないから渴いて行く。あるいは評価され続けても満たされることがない。大きく言えば、土地が乾ききっているのかもしれない。評価を得るためだけに何かを作る。そういった小さく閉じてしまった輪の中にいるような閉塞感。また、私たちの足もとから何かを吸い上げることができないような渴きというのは私の中にもあった。その渴きを何によって自覚したのかはわからない。けれども、2006年から住み始めた神奈川県藤野という土地で、祭礼のお囃子を聞いたときに、

自分がそこにつながりたいという切望みたいな何かが刺激された。その感触は今でもくっきりと残っている。そこがリサーチの原点だったと思う。そして、日本でコンテンポラリーダンスをやっているという自分の足下を掘り下げてもどこにもつながっていないような気がするということ、祭礼のお囃子が自分の深いところに何かの影響を与えるという、その二つの物事をなんとかつなげることができないだろうか? というような切望が生まれて行った。

## 「私たち」とは誰か?

そして、その問題意識をとっかかりとして、助成がなければ難しかったであろうたくさんの民俗芸能、伝統芸能の調査を行うことができた。植物が花を咲かせ実をつけるために必要な最初の行為は根を張ることだ。表面的には小さな双葉がちよこんと開いているだけに見えるときでも、地面の下に根が伸びて行くといったように、私は自分の渴きを感じながら、下へ下へと水を求めて根を伸ばしていった。つまり具体的には、様々な民俗芸能を見に行っただけでなく、芸能を教わっていただく機会も得た。その一つ一つが、自分が固めて来てしまっていた「日本」という概念や、「芸能」という概念をことごとく瓦解してくれた。たくさんの驚きと共に、古い芸能を咲かせ続けた肥沃な土壌のことを思った。それらは、人々の内発的な行為としてあり、外からの評価とは関係なく彼らの誇りを支え続けていた。ただ、どの土地でも当然のことながら、私は外の人間であり続けた。かといって、それぞれの芸能は決して排他的ではなかった。私はそう感じた。外の人間を疎んだり、邪険にしたりすることなく、暖かく迎え入れてくれた。そういった懐の広さというのは、そこに自負に近い誇りというものがあるからなのだと感じる。そして、彼らはその芸能やそれを捧げる信仰によって守られ、位置づけられている。しかし今に至るまでには、様々な状況、飢饉や、圧政、重労働、戦争の影響、などにさらされ続けたのだらうと思う。そのような中でぎりぎりの彼らが発した内側からの声、言葉、歌、そして踊り、そういったものが彼らの芸能を立ち上げ、鍛え上げ、彼ら自身を生かし続けたのだと思う。また、都心から行った私たちと彼らとの大きな違いはindividual(個人)に対して限りなく「dividual」であるという点である。自分という一つの体の領域で線引



2011年8月 愛知県の東栄町にて  
「御園の花祭り」のリサーチ風景

きされていない、何かを常に人と共有することで体がなりたっている、そういった感覚である。そして、調査をするにつれ、私の中に様々な問いが突きつけられることになる。まず「個人」というふうに自分を線引きするということは、ある一方ではとても自由である。自分が何を感じ何を欲し、どう行動するかは自分で決めることができるし、誰かに遠慮することもない。しかし、そんな中で、利益を追求しあうというのはとても殺伐とした感じがする。「dividual」というのは、線引きできない感覚として私が言い出した造語だけれど、そこには一つの窮屈さがある。例えば「村社会」という言葉があるように。しかし、同時に自分を受け入れ位置づけてくれるコミュニティーや信仰に包まれているとも言える。

しかしもちろん、どちらがよいというような議論ではなく、関わりについて考えるひとつの視点を持つことが重要だと感じた。また、誇りについて考えていた。「信仰」というものを失って久しい私たちにとって、何が自分を位置づけるのか？ 位置づけられないということが、自分の誇りを失わせ、どこかからの評価にしがみつき、評価によって自分を位置づけようと必死になってしまうのではないかと。私たちは所詮「individual」というふうに自分をとらえることができない身体感覚を持ち続けているのではないかと。そして、私たちが、失った足もとの向こうの向こう側に見えている、民俗芸能の歴史になんとか接続できるような、現代における取り組みというものはないものか？ そもそも、こうして多用する「私たち」とは何なのか？ と。そして問いに向き合うことが小さなアウトプットを欲し続け、継続する中間報告が始まった。そんなとき、震災が起きた。

### 震災後を生きる中でのリサーチ

震災のショックが私に与えた影響は、思った以上に大きかった。具体的な生活の変化、そして、生き方そのものへの検証と共に、私が作品を作り続けることの意味、役割の可能性について、本気で検証しなければならなかった。とにもかくにも、不安な状況から少しでも心を落ち着かせて生きる場所を求めて、母子避難からすべてが仕切り直しとなっていく。避難するということは、いろいろな周りの状況に対して抗ってでも敢行するというような行為だ。しかし、私はとにかく内側からの求めにしたがうよりほかなかったし、またここまで激しく突



ただの「実験」がメディアになるのか？ の実験  
2012年8月30日 東京国立近代美術館

き上げられるということも今までになかったのかもしれない。そしてそれは理屈を超えているし、理解できない人に説明するというのも難しい。ここで、本当のアウェイな状況が生じてくる。いろいろな意味で少数派になって行く。そして移住した土地は、古くからのコミュニティーが続いて来た場所であった。そして、そこに住むという行為自体が、究極のリサーチと言ってよかった。つまり、古くから続くコミュニティーにおける人の関わり方、私が問いとして持っていた「individual」に対しての「dividual」である。それは、個人として線引きできない人の関わり方である。「線引きできない」というのは、例えば習慣を共有しながら一緒に生きて来た人々特有の、自明のものに対しては説明しないという感覚でもある。「暗黙の了解」という言葉があるけれど、それは共有しているはずのことを大切にすることがゆえに、言葉で線引きすることをさけるという意味合いもあるかもしれない。そういった一つ一つが私にとってはあまりにも今までの生活とかけ離れていた。自分の中にあるdividualの感覚をもう一度観察し直すことになって行く。今まで民俗芸能を観察していたことの問いをさらに深めた問いが次々と私の中に立ち上がって来た。また、今日本で起きつつある事態に対する問いは、これらのいくつかのトピックと深い関係があった。その問いと試行錯誤によって新しい作品を作ろうという思いが自分の中からもう一度よみがえってくることができたのは、その起きつつある事態に向き合うことで生きて行けると思えたからだ。

### 反応に反応する脈を復活させたい

まず私たちは、かつての芸能がそうであったように今現在の何かについて反応できているのだろうか？ 例えばあれだけ大きな震災が起きた。ただの震災ではなかったはずだ。それらに反応することで自分たちを生かそうとしているのだろうか？ 教育や情報に対するある種の従順さが、反応する体を奪っているのではないだろうか？ それは評価を求めることで生きるという習慣の中に没してしまっているからではないのだろうか？ いつでも自分が俯瞰した評価基準にあてはまるかどうか？ 自らその視点で自分を見ってしまうことによって、自負ではなく俯瞰した評価基準によってしか自分を位置づけることができない。あらゆる評価基準で埋め尽くされている世界の中で喘いでいるから、自分が何かに反応することなど思いもよらない。もちろん、これがすべてではない。やや悲観的に見すぎているかもしれない。けれども、こういっ



Asia Interactive Research 中間報告 vol. 02「民俗芸能と3.11以降」  
生きたいから反応する(2011年5月21, 22日)  
小金井アーツスポットシャワー2F

た思いが、もう一度反応を取り戻したい、反応に反応する脈を復活させたいという気持ちに火をつけた。そのためにはまず私が民俗芸能に反応しようと思った。そして民俗芸能に対しての問いを「実験」に落とし込むという行為から、「実験」そのものがメディアとして人々に機能しえないのだろうか？という問いが生まれて行った。自分が何かに反応しているさまを実験に落とし込む。その実験に人々は作品としてではなく単なる実験として参加したり見学したりする、そしてそれに反応せざるを得ないと感じるような場が生まれる。そしていろいろな人が反応を実験に落とし込むという反応が生まれ続けて行ったら？そういったことは現代における芸能に値するのではないだろうか？と。そして、「ただの実験がメディアになるのか？の実験」という試みが立ち上がっていった。

### 目的以外の何かが生まれる場としての「実験」

私自身が実験するだけだったら、今までの作品名にも「実験」という名がついているし、劇場空間での上演であっても実験的な要素が常にあった。けれども、作品として提示されることのよい部分もあれば足りない部分もある。そして、できるだけそれぞれのフィールドで生きている普通の人々が、つまり表現のアウトプットとは無縁に見える人々が、それぞれの問題意識を実験に落とし込むことができれば、と

いう思いだった。それは、護岸整備された水路を少しずつ改善して、本来のごつごつした岩や土や水草のある水路に戻して行くような感覚かもしれない。そうすることで、そこには目的以外のたくさんのことが起きる。水路は水を、目的の田んぼにひくためのものだ。けれど、その水路に目的とは関係のない生物の営みが生まれ、関わりが複雑に絡み合っていくといったように、普通の人々が実験を作ってアウトプットするという行為が様々な目的以外の何かをざわざわと起こして行くかもしれない。例えば、見ている人が不快を表明するかもしれないし、それが何かの議論を生むかもしれない。また、実験の目的がうまくいかずに、実験以外の要素が拡大して見えてくるかもしれない。また、そこに立ち会っている人々の反応自体が、現在起きている人のありようを象徴するようになってくるかもしれない。この試みは今始まったばかりだけれど、目立たないところにいろいろな種を蒔くように、小さな試みを続けている最中であり、今まで蒔いた種を誰かが大切につなげて行ってくれたりしている。

### 引かれた線を解きたい

また、作品を上演することについての様々な問いそのものを、芸能という枠組みを使って観察してみるという試みに取り組む作品『私的解剖実験-6 ~虚像からの旅立ち~』を国内の三カ所で上演すること



3点とも：  
「私的解剖実験-6 ~虚像からの旅立ち~」(福岡、横浜、  
神戸ツアー/2012年12月22日~2013年2月4日)  
横浜公演:2013年1月13, 14日 ST Spot  
photo: ©松本和幸



## つなごうとする意志 —2013年上半期の舞台を見て

松岡和子  
Kazuko Matsuoka

ができた。「作品」という線引きや、作品に対する「評価」という線引き、また、「ダンスを見る目的」という線引きをどのように解いて行くことができるか？それは自分が線引きしている物事をどこまで自覚できるか？という戦いでもあったと思う。そういった線引きが自分を閉じ込めている、その息苦しさをできるだけはつきりと感じられるようなシステムをわざと作ってみる実験といってもいい。その取り組みは本当に苦しい作業でもあったけれど、現実に向き合ってる感覚が濃くなって行くということが希望だった。そして、それが出演者全員にとって、また立ち会ってくださった方々にとって、線引きを解いて生きて行けるような力になっていけたら、という切実な願いもあった。

### 根を張って来たことの意味

私自身のアーティスト活動にとって、この三年間にこれだけの大きな転換期を迎えるということは予想していなかった。継続した支援を受けている期間は、私自身の根の張り方に大きな力を与え、震災というショックによって今までの問いに対して大きな示唆を与えられた。そして、新たなアウトプットの可能性を手にすることができた。今後、その取り組みが自分でも予期しない様々な目的以外の出会いや出来事を通して様々な枝葉を伸ばし、多様な活動へと押し上げ続けるだろう。今、日本は様々な危機的状況を迎えつつある。その中で生きるにあたって、私自身、押しつぶされないだけの根をはるることができた。そのことが、この状況の中でアーティストとして役割を果たして行く上で非常に大きいということは言うまでもない。

\*2010-2012年度セゾン・フェロー



手塚夏子(てつか・なつこ)

ダンサー/振付家。96年より、マイムからダンスへと以降しつつ、既成のテクニックではないスタイルの試行錯誤をテーマに活動を続ける。01年より自身の体を観察する『私的解剖実験シリーズ』始動。02年、私的な実験の小さな成果が『私的解剖実験-2』に結晶。同作品はトヨタコレオグラフィアワードファイナリストとして同年7月に上演。その後、ニューヨーク、シドニー、ベルリン、ポーランド、ジャカルタなど各地での交流や上演を行う。また、独自の手法でコンテンポラリーダンスに取り組むアーティストと対話し、彼らの手法について思考し体で試行する「道場破り」や、体をテーマに建築家や鍼灸医など様々な職種の方とのトークをし、観客を巻き込んでの実験を試みる「からだカフェ」など、自主企画も多数。10年より、国の枠組みを疑って民俗芸能を観察する試みであるAsia Interactive Researchを始動。

<http://natsukote-info.blogspot.jp/>

当財団評議員として、また翻訳者としてのお立場から、松岡氏に演劇界の動向について寄稿していただいた。  
(編集部)

2013年も半ばを過ぎました。

3・11から二年経ち、参議院選挙で自民党が圧勝したこの年は、演劇の分野では将来どのように記憶されるのでしょうか。

新装なった歌舞伎座開場の年？

寺山修司没後30年？

今年の私の劇場通いは立川志の輔の落語で幕を開け、作り手側の一員としての仕事は、演出家・蜷川幸雄率いる彩の国さいたま芸術劇場のシェイクスピア・シリーズ第27弾『ヘンリー四世』(二部作を2012年の晩秋に訳了)の稽古から始まりました。

新歌舞伎座の柿落しと寺山修司にまつわる諸イベントという大きな二点にも関連することですが、舞台をはさむ表と裏から見てきたこの半年あまりを振り返ると、私の頭に浮かんでくる一連の言葉群があります。

つなぐ、引き継ぐ、手渡す、伝える、残す、バトンタッチ、継承、などなど。

歌舞伎座の場合は、昨年秋に中村勘三郎が、今年に入って市川團十郎が亡くなり、その喪失を背負った開場であるだけに、日本を代表するこの伝統芸能の根幹を「継承」することの重要性が、歌舞伎界の内外で論じられ大きな課題となっています。

けれど、この「引き継ぐ」とか「継承する」という姿勢が今年には現代演劇の分野でも目につくのです。そのひとつのかたちか再演。以下に挙げるのがその例ですが、これらは私が見たものだけです、もっと他にもあるかもしれません。

### 1) 作・演出をしてきた作家による自作の再演。

小野寺修二演出、カンパニーデラシネラ『異邦人』(アルベール・カミュ作の同名の小説をもとに2010年に初演された)

松尾スズキ作・演出『マシーン日記』(松尾の主宰劇団、大人計画による初演は1996年。その後再演・再々演三回。今回は東京芸術劇場の制作、キャスト一新)

前田司郎作・演出『いやむしろわすれて草』(前田の主宰劇団、五反田団による初演は2004年、再演は2007年。今回の主催は青山円形劇場とネルケプランニング。不治の病に冒された主役を満島ひかりが好演)

ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出『わが闇』(初演は2007年、KERAが主宰する劇団ナイロン100°Cの創立20周年記念公演。)